

重要文化財「松城家住宅」の 塗壁について

その2. 主屋2階外壁石積風漆喰塗 大壁（擬石塗り）

早稲田大学理工学術院
嘱託研究員

齋藤金次郎

● 2階外壁概要

松城家住宅は前号で述べましたが、2階外壁は和風と洋風を融合したデザインで窓廻り等を含めて全て漆喰塗籠としています。軒裏は土蔵や洋風建築で見られるアール状の揚げ裏とし、壁面は漆喰で長押状の蛇腹見切りを設け、目地を切り、石積を模した漆喰大壁仕上げ（擬石塗り）となっています（写真－1）。そして、次号以降で紹介をする2階南側正面及び北側窓廻りには漆喰の額縁蛇腹が施され、柱頭を漆喰で装飾をした、円柱が建てられているほかに、北側軒下見切り壁の一部には漆喰を盛り上げた唐草模様の鍍絵が描かれています。

本号では松城家住宅の特長の一つである、2階外壁の石積風漆喰塗大壁（擬石塗り）について紹介をしたいと思います。外壁面は大正から戦前の間に北土蔵と共に下地から補修され、更に平成21年の災害復旧工事では上塗漆喰のみとの2回に渡って補修が行われている。今回の調査では石積風漆喰塗大壁は在来の土蔵造りの技法で行われ、海鼠壁と同様の中塗面に瓦を張り、その上に漆喰を塗り重ねて石積を模した擬石塗仕上げであることが明らかになった。また、大正から戦前の間の補修は震災や経年劣化による建物の四隅の柱周辺の壁下地に使用している竹が腐食をし、崩落したことなどから行われたことも確認できた。

主屋とミセの当初の石積風漆喰塗大壁は下地から漆喰仕上げ面まで図－1のように全体の壁の厚みが110mm程度となっていた。下地は竹木舞下地で横木舞竹は土蔵と同様に柱に約12cm間隔で施したツタ掛け刻みに載せ、藁縄で格子状に編み、隅柱部分で折り曲げていた。場所によっては和釘で固定している箇所も見受けられた（写真－2）。横木舞竹は丸竹と真竹を割ったものが併用されているところも見られた。また、後方の補修では真竹を細かく割ったものや丸竹のみ及び丸竹と割竹を併用している箇所も見られた。恐らく、補修年代にもよりますが、施工職人の違いにもよると考えられる。次に、塗層は荒壁と中塗壁との2回塗りとなっていた（写真－3）。荒壁は茶褐色で粘性が悪く小石混じりで鉄分の多いものが使用され、通常のものより藁切も多く土蔵工法でも行われる木舞竹を編んだ時に垂らしておいた縄を塗り込んでいた。中塗りは荒壁土を篩っ

たものを用い、斑直し等を省略して行っている。従って、中塗面は不陸が大きいように思われた。場所によっては荒壁と中塗土の重みで木舞竹が撓んでいる部分もあった。

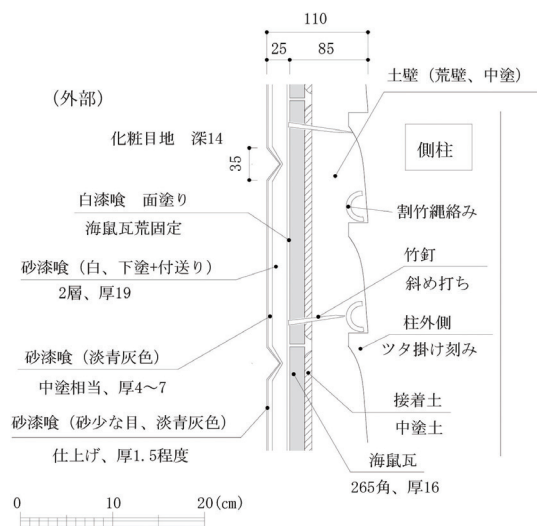
海鼠瓦は中塗土面に張られていた。瓦の大きさは265mm角で厚さ16mmのものが使用されていた（写真－4）。当初壁の海鼠瓦は32mm程度の厚さに塗った荒壁面上に8mm程度の中塗を施し、その上に接着のための中塗土を団子状に塗り、張り付けた後に竹釘で止めていた。一方、後年の補修部分では漆喰で瓦を張り付けているところや一部北土蔵と同一仕様の海鼠瓦に接着土（荒壁土を篩ったもの）を四ヶ所に付けて張り付けている箇所も見受けられた（写真－5）。補修は瓦の四辺に穴のある当初のものは再利用し、辺に溝が付いた瓦を新規で補足を行っていた。瓦の張り方は「破れ目地」で行われ、目地部分は雨水の浸透防止及び瓦間の接着力、更には石積み模様仕上げ面に亀裂が出てこないように漆喰で丁寧に埋めていた。尚、主屋の海鼠瓦は各土蔵の当初海鼠壁に使用されているものと同じで、焼成前にあらかじめ4辺にφ8mm内外に固定用の穴を開けていた。また、海鼠瓦の固定は竹釘で行い、より強固に張り付けるために壁面に対して垂直方向ではなく内側に向かうように斜めに止めていた。これらの工法はミセや土蔵3棟でも共通して行われていた。

石積み模様の工程は次号でも述べますが漆喰で海鼠瓦面から仕上げ面まで4回塗りで行なっていた。はじめに、瓦面との接着のための生漆喰を塗り、次に下塗りとして付送りをかねて砂漆喰を2回に分けて19mm程度の厚さに塗り重ねた後に、中塗りとして淡青灰色漆喰を4～7mmの厚さに塗り、更に砂が少ない淡青灰色漆喰を再度1.5mm程度の厚さで塗り重ねて仕上げていた。特に東西北面に比べて南面は淡灰色漆喰を塗った上に、白漆喰のノロを塗っているように思われた。石積みの輪郭は幅35mm・深さ14mmの三角断面の化粧目地となっていた。石積み模様の配列・収まりの割付が規則正しいこと、また目地部分の傾斜角度が一定していることや下地の砂漆喰が確認できないことから、鍍による化粧付け目地ではなく、石積み模様の立体感を出すために敢えて斜めに割った両しのぎ状の目地棒を貼り付け、それに沿って砂漆喰で中塗りまで行った後に、目地棒

を取り除き漆喰を塗って仕上げたものと思われる（写真－6）。このことは目地幅が狭い箇所や浅い所、また急角度部分などからも確認できた。よって、松城家住宅の石積み模様は職人の手で一枚一枚漆喰を塗り重ね、時間を掛け漆喰の面を取りながら仕上げたものと考えられる。ここでは、洋風建築を強調するために手間をかけ良いものを造ろうとするための当時の職人の創意工夫を伺うことができた。



写真－1 東北面修理中



図－1 主屋2階石積風漆喰塗大壁（南側）断面詳細図（工事報告書より）



写真－2 当初の壁下地と過去の補修下地（北面）
柱部分の割竹は後年に補修された部分



写真－3 塗層は荒壁と中塗壁の2回塗りとなっている。右側は過去に瓦・下地から補修された範囲（東面）で細かく割った竹を使用している



写真－4 当初の瓦張り状態（東面）



写真－5 当初壁で荒壁・瓦・漆喰塗層詳細（南面）
当初壁は荒壁面に中塗土を塗り重ねた後に、瓦を竹釘で止めている



写真－6 瓦面上層面の砂漆喰が接着するように、生漆喰を塗っている。しかし、目地部分は生漆喰の上には砂漆喰が見られない。よって斜めに削った両しのぎ状の目地棒を使用したものと考えられる

引用・出典・参考文献

・重要文化財 松城家住宅主屋ほか6棟保存修理工事報告書本文編 公益財団法人文化財建造物保存技術協会 令和4年12月 沼津市